

子どもの本

研究会



【私の一冊】

新美南吉詩集「墓碑銘」「春風」を読む

新美南吉詩集『墓碑銘』異聖歌編(英宝社)・同詩集(ハルキ文庫)

有人 賢治



新美南吉の詩と聞いて、おやと思う人が多いかも知れない。どうして童話とともに、いやまして詩は心の壁に染み入ってくる。本詩集はその九五篇に纏められた中の佳品二篇である。

「墓碑銘」の冒頭は「この石の上を過る小鳥たちよ。しばしここに翼をやすめよ。」と、呼びかける。自分は何かの間違いで、人間に生まれてしまったが、魂は鳥たちと異ならなかったと続ける。さらに自分の遍歴の中、ロマンの灯をともし戦いに破れてしまったと述懐する。それゆえ小鳥たちにとどきこの碑に遊びに来て、歌ってくれ、踊ってみせてくれと呼びかける。

最後に、自分がこの墓碑銘に鳥たちの言葉で書けないことを、人間のややこしい言葉でしか書けないことを、返すがえす残念に思うと結ぶ。

「春風」の冒頭は「おかあさん、あなたのおもかげは、春、乳母車にのってやってくる。」と始まり、暗唱にこちよい韻律が続く。南吉の根底にある母性への渴望―母と兄を早くに亡くしたことに依る喪失感と、生命への哀惜の感慨がひと幕の光景として、浮かび上がる。

さらに、籐の乳母車がきゆるきゆると鳴く音や母や兄への問い掛けと応答が語られる。「春風ときて、春風といってしまう。」と時間と空間が風のように過ってゆく。

こうして、南吉の詩という、もう一つの側面に光を当ててみると、童話作品の余情が一層際立って豊かに感じられる。例えば、「手袋を買いに」の狐の母子と帽子屋、そしてひとの母子の間答がさらに愛おしくなってくる。ある意味、狐の子に宿世の縁の行方を託したのだと言える。

若い頃、好きな作品ばかり読んでいた私に、「作家を本当に深く理解したいなら、全集を読みなさい」と言ってくれた先輩がいたが、今では如何ともしがたく、悔やむばかりである。

ともあれ、秋の夜長、自己の琴線をかき鳴らすような作家や作品があれば、一作もう一作と読破してみても如何だろうか。すると、作者の思想、精神性や作品世界がより深く、広く味わえること請け合いです。

(熊本子どもの本の研究会 会員)